

学校アップデートで子どもも大人も笑顔あふれる学校づくり

～チーム担任・学年教科担任制などの取組で教員に余白を生み出す～

渋谷区立猿楽小学校 校長 成田 弥生

1. はじめに (主題設定の理由)

創立110周年を目前に控える本校は渋谷区の中でも、落ち着いた街並みで、最新の流行と昔からの伝統を重んじる地域にある。学校規模は、12学級で全校児童は298名、学校教育目標「感じ 考え 広げる 子ども」を掲げ、教育活動を行っている。富山県の学校と姉妹校交流48周年を迎え、令和6年度より文部科学省の時数特例制度を活用して探究「シブヤ未来科」にも力を入れている。

「子どもも大人も笑顔あふれる学校」を目指し、希望を胸に本校に校長として着任した4年前。多様な配慮や特別な支援を要する児童の増加に加え、いじめ問題の悪化、学力の2極化に加えて、若手教員の増加など、通常に学級を維持することが困難な学年が複数あった。教員もまた、日々の対応に追われ、初年度は、長時間勤務教員の割合が区内ワースト1という悪循環に陥っていた。

教員が元気で笑顔でいることが、子どもたちの幸せに繋がると「子どもにとって教師は最大の教育環境である」という信条のもと、校長として何ができるか問い直し、「学校アップデート」と「子ども発(子ども主体)の学校づくり」に取り組んだ。

2. 学校アップデートのビジョンとシステムづくり

学校マネジメントと子ども発(子ども主体)の取組の両輪を考えた際に、校長の最大の役割は、システムの構築をし、その後は任せること。そして、教員に時間を生み出し、余白をつくること。

そのために以下のことに取り組んだ。

(1) 学校アップデートの取組

児童、保護者の多様なニーズと若手教員の増加に伴い、チームで協力して対応し、一人で悩みや課題を抱え込ませないチーム力がアップする体制づくりを進めた。教員同士が支え合い、安心して働ける職場環境を整えることが、児童の成長にも繋がるからである。また、教員が授業準備や探究学習の充実のために十分に時間の確保ができるよう、余白を持てる働き方が必要であると考えた。

従来の学校運営を見直し、単なる「改善」ではなく、今ある良さをさらに高める「アップデート」を進めることを決意した。3年間かけて実現した主なアップデートは、以下の9つである。

*** さるがく アップデート ***

1. 学年チーム担任制(3年生以上)⇒専科教員も担任し、週交代
2. 学年教科担任制⇒1教員が3教科程度の担当
3. 家庭自主学習への移行(デジタル教材活用)⇒一律宿題から家庭学習を自主選択する
4. 連絡帳・欠席連絡のDX化⇒週予定表の配布と保護者へ配信・メールシステムによる欠席連絡
5. 水曜日午前授業化⇒午後の教員研修時間確保
6. 学校公開日の設定減⇒「いつでも学校公開」への転換と見守りボランティア活動へ
7. 通知表の簡素化⇒年に1回・所見は面談にて伝える
8. 地域・保護者ボランティア、ゲストティーチャーの積極的活用
9. アイデア・ボックスの活用⇒良いアイデアは早期に実施へ(年度末評価からの移行)

(2) 教員意識のアップデート

9つのアップデートを実施するに当たり、一番の課題は、教員の新たな変化に対する意識のアップデートである。

着手した当初、多くの教員は、今までのあり方を変えることへの抵抗感をもっていった。本校の現状を分析し、時代の動向と先行事例を研究した上で、アップデートの目的と視点を示し、より効果的であることを伝え、何度も話し合いを重ねた。新年度を迎え、トライ&エラーは当たり前であり、とにかくやってみようとしてスタートした。

学校アップデートの視点としては「子どもにとって良いか。『楽しいか・学びがあるか・分かりやすいか』そして、大人にとっても良いか。」である。児童、教員双方のウェルビーイングが無ければアップデートは成し遂げられないと考えたからである。

3. 学校アップデートの9つのシステム

(1) 学年力を高める（チーム担任制・学年教科担任制）

学校アップデートの中核となるのが、3年生以上の学年で導入した「チーム担任制」と「学年教科担任制」である。以下が具体的な取組である。

○チーム担任制について

専科教員も加わり、2学級を3人で担当し、1週間交代で学級担任を務める仕組みとした。学級のルーティンやルール、学級会の運営も学年全体で話し合い、学年子ども会議や学年集会を定期的に開催することで、学年全体の力を高めてきた。

この体制により、児童からは「1人ではなく、3人の担任がいるので、自分が相談しやすい先生に相談できるからいい。」と言った声が聞かれるようになった。保護者からも「重めの相談は学年主任に話せて安心」「若い先生はよく遊んでくれる」など、それぞれの教員の良さが発揮され、多様なニーズに応えられていることへの感謝の声が寄せられている。学校評価アンケートも肯定的回答が9割強と高評価であった。

教員側も、チームで協力し合うことで、問題が生じても一人で抱え込まずに済み、互いに支え合いながら児童対応や学年運営に当たることで「学年力を高める」ことができている。若手教員は先輩教員から学びつつ、自分の得意分野を生かして児童と関わる機会が増え、成長を実感している。ベテラン教員も若手の柔軟な発想やエネルギーに刺激を受け、学校全体の活力向上につながっている。

○学年教科担任制について

学年内で教員が担当したい教科、また研究を深めたい教科を2～3教科程度を学年の話し合いで選択し、分担する。通年で同じ担当教員が、両学級で同教科、同時数を担う。イメージとしては中学校の教科担任制に近い。

教科が絞られることで、専門性とプロ意識が高まり、児童へはよりよい授業ができる。また、自分が選択した教科を担当することから教員のモチベーションも高まり、教材研究や準備も焦点化されるため、従来の半分の時間でできるため、余白が生まれる。

これらの取組により、教員同士がチームで協力し合い、業務の分担や情報共有が進み、授業や探究学習の質が向上した。教員が余裕をもって子どもたちと向き合えることで、児童の主体的な学びや挑戦を支える環境が整った。さらには、他校の研究発表会にすすんで参加し、自ら校内に還元研修をするなど職員室では、教材研究など授業に関わる話題が飛び交い、切磋琢磨する姿が増えた。

(2) 家庭自主学习と週予定表で学びを自己調整

○家庭自主学习で選んで学ぶ

本校の児童は、受験を目標に中学年から塾に通う児童の増加がある一方で、学習に躓きのある児童など学びの多様化からの学力の2極化の実情（学力調査等結果による）がある。

そこで、「読み・書き・計算」等の基礎的な一律宿題を廃止し、学びを児童が自分で選べるよう家庭自主学习に移行した。本年度3年目を迎える。

何をどのように学ぶとよいかは、週予定表を毎週金曜日に児童へ配布し、今週のおすすめの家庭学習の内容を提示する。保護者へも週末に添付資料として配信している。

「誰も取り残さない学び」を目指し、学年の学習内容において躓きのある児童や発展学習を行いたい児童のために、水曜日の午後に「学びプラスの時間」を設けている。担任は、児童と保護者の学び相談にのり、めあてを決めて学びのサポートを個別に行う。また、朝学習やモジュールの時間に算数や言語学習のためのデジタル教材を活用して学びのフォローアップを行う。

それにより、児童にとっては、個別のニーズに応じたよりきめ細かな学習支援を受けられるようになった。教員にとっても、以前は日々の宿題や音読カードのチェックや宿題の丸付けに追われ、休み時間も子供と向き合う時間がとれずにいたが、上記の取組により、休み時間は校庭のあちこちで子供と全力で遊ぶ教員の姿が増え、子どもの笑顔が増え、相乗効果となっている。

○週予定表で学びの見通しと連絡帳のDX化

紙での連絡帳を廃止し、週予定表を金曜日に児童には印刷配布し、保護者へはメール配信する。週予定表には、次週の学習予定や漢字テストや単元テストの予告、その週の推奨する家庭学習など、児童・保護者が必要な情報を掲載する。そのことにより、見通しをもって、自主学习の計画を立て、テストの準備などに備えることができるようになった。また、毎日の連絡帳を廃止して、週予定表にしたことで、児童が連絡帳を書き、教員がそれを確認するために毎日10分かかっていた時間を行間の学びや読書時間に充てることができた。

保護者との連絡のやりとりは、紙の連絡帳からメールシステムを活用し、水泳カードや移動教室前に健康カードもデジタル回答として効率化を図り、校務DXにより時間を生み出すことができた。

(3) 教員に時間を生み出し、余白をつくる取組

○学校公開日の設定から「いつでも学校公開」へ

学校公開日は教職員にとって、緊張の一日。全授業の準備をいつもより入念にして、どのタイミングを見られても大丈夫なようにする。

本校も当初は昔ながらの授業参観のイメージに違わず、児童も教員も見られる意識で頑張る日、経験の少ない若手教員にとってはストレスフルな一日となる。

一方で、保護者の立場に立つと、学校公開日は、学校での子どもの様子を見ることができる年に数回の貴重な機会でもある。

従来の授業参観のイメージから転換して、「いつでも学校公開」で学校をいつでも見られるように開放した。日常の授業や生活の様子、小さなイベント、ゲストティーチャーによる授業や研究授業など、保護者に見に来てもらう機会を増やした。全体の公開日は年に1度、道徳公開日を残し、年に2回以上の学年公開日を設け、各学年で見に来て欲しいタイミングで保護者に案内をすることとした。

それにより、保護者からは「来たいときに学校の様子を見ることができありがたい」と大好評であり、教員にとっても特別な準備をせずに、日常の様子を見てもらうことが当たり前になってきた。

○保護者・PTA・地域ボランティアの協力支援

また、保護者・地域による「はぐくみボランティア（通称：はぐボ）」の以下の活動を推進した。参加した保護者からは「先生は毎日、本当に大変ですね。お手伝いできる時は飛んできます！」と保護者の学校や教員に対する理解、さらには多様なニーズが必要な児童への理解も深まり、無くてはならない強力な学校サポーターとして支えてくれている。

*** はぐくみボランティア（通称：はぐボ） ***

授業支援・給食準備・清掃活動・登下校時・おはようボラ（校門や交差点で挨拶・見守り）
読み聞かせ・行事準備・行事運営支援（受付等）・花いっぱいプロジェクト（花壇整備）
姉妹校交流企画・スポーツテスト・遠足・校外学習・移動教室等のサポート

○さるがく応援団（地域学校協働推進本部）によるコーディネート

探究「シブヤ未来科」や生活科では、地域学校協働推進本部が、地域や地元企業との窓口となり、地域人材バンクをつくり、担当教員と連携してコーディネーターを担うなど学校のよき伴走者となり、支援体制が構築されている。それにより、「子ども発」を実現する地域や地元企業を巻き込んだ「さるラボ（テーマ探究学習）」を展開することができた。

○通知表の簡素化と対話重視

通知表を要録に準じた内容で年に1回の配布とし、文章による所見から、年に2回（7月・2月）の個人面談にて、余裕をもって時間を設定し、保護者との対話により、伝えることとした。また、学習状況を保護者が把握できるようにするため、システムを活用した単元テストの分析シートを定期的に配布するなど、こまめに知る機会を設け、必要に応じていつでも教育相談を実施した。

それにより、教員と保護者が日常的に話す機会が増えることで、問題が起きた際は早期にスムーズな解決にもつながっており、学校評価アンケートの「学校は児童や保護者の相談にのってくれている」の項目で全学年9割の肯定的回答を得ることができた。

教員にとっても学期末の多忙感が解消され、余裕をもって学期末を迎えらえるようになった。

○教員研修日の設定とアイデア・ボックスの活用

渋谷区の取組で水曜日を全校午前授業とし、午後は、TLD（ティーチャー・ラーニング・デー）により、水曜日の午後は学校で教員の学びのための時間を自由に設定できるようになった。校内研究会の他、お出かけTLD（他校の研究授業に参加）など裁量の時間が増えた。

また、教員による年度評価を「アイデア・ボックス」として、校内アプリのチャンネルに設け、改善点がある場合は次年度に先送りせず、その都度、改善案と共にチャンネルに投稿し、担当分掌や経営会議で話し合い、アップデートする取組を行った。年度を待たずして、よりよいことは早期に変えていくことで教員のアイデアや考えを活かして主体的に自走する教員集団へと変わってきた。

4. 学校アップデートの好循環とウェルビーイング

「子どもも大人も笑顔あふれる学校」を実現するためのアップデートは、今後も時代や子どもたちの変化に合わせて進化し続ける必要がある。校長として、教員と児童のウェルビーイングを最優先に、今後も「誰も置き去りにしない学校づくり」を推進していきたいと考えている。